

チベット文化研究会2020年新春のつどい

日時 2020年1月25日(土) 12:30~16:00

第1部 講演会 12:30~14:00

会場 西五反田一三町会館

演題 『アルナチャル・プラデーシュの仏教徒モンパとその隣人たち』

講師 脇田道子 (日本ブータン研究所研究員/チベット文化研究会会員)

1951年東京生まれ。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業。旅行会社に28年勤務した後、大学院へ。

2014年、慶應義塾大学大学院へ。大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学、博士(社会学)専攻は文化人類学及び、南アジア地域研究。

著書『モンパーインド・ブータン国境の民』法蔵館、2019年

共著「民族衣装を読む—インド、アルナチャル・プラデーシュのモンパの事例から」

(鈴木正崇編『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』) 風響社、2015年

講演内容

インド北東部のアルナチャル・プラデーシュ州(旧:NEFA)は、ブータン・中国・ミャンマーの三カ国と国境を接する人口希薄な州で、ユニークな文化を持った多彩なトライブ集団が住んでいる。中国との未画定な国境線(マクマホン・ライン)の南側に位置し、1992年に外国人の訪問が解禁されたものの、特別許可が必要なため訪れる外国人の数は少なく、インド他州の人びとにもその実情はよく知られていない。

かつてイギリス植民地政府の人びとから「ヒマラヤの蛮族」などと呼ばれ、現在はインドの指定トライブ(ScheduledTribe)となっている人びとの中には、州西部のタワン県、西カメン県の多数派を占めるモンパ(Monpa)も含まれている。モンパとは、かつてはチベット南方のブータンなども含むモンパの地、あるいはモンユル一帯に住む「インド人でもチベット人でもない周縁の民」をイメージする総称であった。現在、この総称であるモンパを民族名の由来とする人びとは、インド、ブータン、そして中国(チベット自治区)の三カ国に見られ、モンパ、メンバ、門巴族などと他称されている。

タワンはダライ・ラマ6世の生誕地であり、タワン県から西カメン県そしてアッサムに至る地域は1959年のダライ・ラマ法王のインド亡命時の脱出ルートに当たる。この地域は17世紀からチベットの行政下にあり、実質的にインドの行政が及んだのは1951年以降である。それまでは、政治だけでなく、仏教を紐帯として文化的にもチベットやブータンとの深い関係を築いていた。今回は、インドのモンパを中心に、州の地政学上の問題、彼らの隣人でもある州内の他のトライブの人びとやブータン東部の人びととの関わりなどについて報告する。



第2部総会/懇親会 14:15~16:00

会場 マヤ・インドレストラン(講演会場より移動徒歩5分)

会費 4000円(講演会/懇親会費含)

*講演会のみTCC会員1800円 一般2000円

*懇親会のみ3000円

